実習報告（学校変革基盤実習）

特別支援学校の特色ある教育的資源と自立活動の在り方を探る
－病弱・知的障害・肢体不自由のある児童生徒がともに学ぶ特別支援学校の実習を通して－

江口　亜加音（子ども支援探究コース特別支援教育系：現職教員）

１．探究実習のテーマと設定の理由

インクルーシブ教育が推進され，平成 28 年施行の障害者差別解消法では，個人に必要な合理的配慮の提供が法的義務となった。また，平成 29・30 年改訂の学習指導要領においては，「社会に開かれた教育課程」という考えのもと「子供の障害の重度・重複化，多様化」の対応について述べられており，障害のある子どもたちの教育の改善や充実が，連携・協働という視点からも学校現場に求められている。そのためには，特別支援学校がセンター的役割を発揮し，地域と連携していくことがますます重要になってくる。

加えて，特別支援学級や通級による指導の教育課程において，自立活動を取り入れることが明示された。自立活動は本来，特別支援学校独自に設けられた教育内容である。障害の重度・重複化，多様化傾向が著しい今日において，特別支援学校だけではなく特別支援教育に関わる全ての教師が自立活動の指導とは何かを理解し,適切な指導を具現化できるかが特別支援教育の充実を左右すると考える。しかし自立活動は各教科とは異なり，子ども一人一人が抱える困難さの背景を探り，個に応じた指導目標・内容を設定していかなければならない。子どもの実態把握の方法，課題の絞り方，個別の指導計画の作成，他教師との連携等，様々な課題があるのが現状である。そこで，大学院 2 年間を通した研究では，「特別支援学校のセンター的機能」「自立活動」をキーワードとして，特別支援学校が有する知見や実践を生かし，特別な配慮が必要な子どもたちの自立活動および，特別支援教育の充実につながるための方法や，地域との連携の在り方を探りたいと考える。

実習校は，病弱・知的障害・肢体不自由のある児童生徒がともに学ぶ 3 障害種併設の特別支援学校であり，県内唯一の病弱児対象特別支援学校である。そこで，本探究実習を通して，3 障害種併設の特別支援学校がどのような教育的資源（校内組織や支援体制，地域支援等）によって，校内支援や地域支援を組織・構築しているのか，また，病弱教育における自立活動のポイントはどのようなものか，その在り方を探りたいと考え「特別支援学校の特色ある教育的資源と自立活動の在り方を探る」というテーマを設定した。

２．探究実習の研究目標

（１）3 障害種（病弱・知的障害・肢体不自由）併設の特別支援学校の教育的資源（校内組織や支援体制，地域支援等）の特色について知る。

（２）病弱教育の現状を知り，病弱児童生徒の自立活動の実際を探る。

３．探究実習の概要

実習校名称	A 特別支援学校
実習期間	2020 年 9 月 1 日～2021 年 1 月 26 日（毎週火曜日）
校舎概要	【本校】・本校舎（知的障害・肢体不自由・病弱：小中高） ・B 医療センター内訪問教育学級（病弱：小中高） ・分校舎（病弱:小中高） 【分校】・C 分校（知的障害：小中）

実習内容	研究目標（１）に該当する内容（抜粋） ・A 特別支援学校の概要について ・個別の教育支援計画，合理的配慮について　・校内研究，交流教育について ・病弱生徒の進路について　・教育と医療の連携 ・病弱教育ネットワークについて　・ICT 教育について ・分校舎，C 分校の教育について　・センター的機能，地域支援について ・特別支援教育コーディネーター地区別研修会参加 ・B 医療センター内訪問教育学級について　・病弱生徒の生徒指導について
	研究目標（２）に該当する内容（抜粋） ・病弱教育について　・個別の指導計画，自立活動指導計画について ・自立活動演習に向けた実態把握 ・病弱児童生徒の自立活動演習計画作成及び授業実践

自立活動演習を行うにあたり，主に生徒の実態を把握する過程に重点を置き取り組んだ。個別の教育支援計画・個別の指導計画の活用，担任教師と情報交換，日常場面での生徒観察等を行い，生徒の障害特性や課題,興味関心に応じた題材選定を行い,授業の組立や演習実施についての考察を行った。

４．探究実習の成果と課題

今回の探究実習では，3 障害種併設，また病弱児対象校の様々な特色を知ることが目標であった。A 特別支援学校は，本校舎，分校舎，分校の校舎に分かれ，3 障害種の児童生徒が在籍する学校であるため，非常に複雑な組織体制となっていた。また，障害の状況に応じて教育課程や教育内容も多様であった。この複雑で多様な校内組織，教育活動について，すべて網羅できるほどの様々な研修や，施設見学，授業演習等の場を設定していただき，A 特別支援学校の特色ある教育的資源を知る非常に貴重な機会となった。また，特別支援学校という学校組織や特別支援教育を俯瞰的に考える，有意義な経験ができたと思う。

主に関わった本校舎では，小学部・中学部・高等部の児童生徒が在籍し，障害の状況によって 6 つの教育課程に分かれ，個に応じた教育活動が行われていた。病弱教育では，医療機関とのつながりが必須であり，日々の情報共有や連携の大切さを痛感した。地域支援については，県東部の特別支援教育のセンター校として地域の学校等や様々な関係機関（医療，福祉，行政等）と連携し，多角的な支援が行われていた。また，A 特別支援学校を中心に県内の病弱教育のネットワークを構築し，県外の病弱特別支援学校等も含めた情報共有，専門性の向上を図るための研修等が展開されていた。

一方で，異校種（小・中・高），障害種や障害の程度（通常，重度・重複）に応じた教育課程，個々の子どもの実態といった，様々な条件が絡み合う複雑な状況は，教職員同士の情報共有や連携の難しさ,専門性の担保といった,多くの課題につながるということを,身をもって体験することができた。また，医療・福祉機関との関係づくりや連携，調整等の重要さと同時に，難しさを改めて認識した。

自立活動については，この実習を通して病弱教育に特化した自立活動のポイントや具体的な内容を探りたいと考えていた。しかし，病弱児対象の自立活動の授業実践を実際に行ってみて，重要だと再認識したのは，障害種や障害の程度等に関わらず，目の前の子どもの実態を丁寧かつ適切に把握すること，児童生徒の課題や教育的ニーズを的確に捉え，学校生活を支える基盤として自立活動をとらえるということであった。このような自立活動の考え方を基軸に，障害のある子どもに関わるすべての教師が同じ意識をもち，目の前の子どもに丁寧に向き合っていくことが大切であるという視点に，改めて立ち返ることができた。

本実習を通して，障害種をはじめ様々な背景や環境が絡み合い複雑な状況となる特別支援教育において，共通する教育活動である自立活動の価値を見つめ，維持向上させていく必要性を強く感じた。